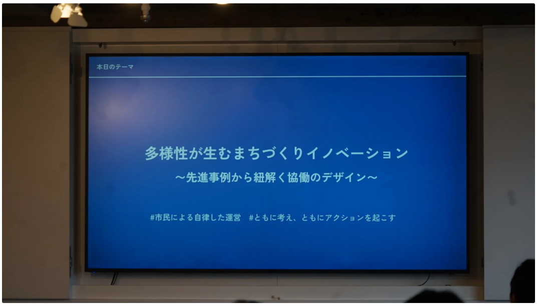
2月3日開催トヨタ財団イベント実施レポート📝

「多様性が生むまちづくりイノベーション～先進事例から紐解く協働のデザイン～」

2025年2月3日(月)、トヨタ財団の助成対象者の同窓会企画の1つとして、**「多様性が生むまちづくりイノベーション～先進事例から紐解く協働のデザイン～」**を開催しました。

助成対象者が取り組む「自治型社会」をテーマに、各地域でユニークな取り組みを行う登壇者をお迎えしトークセッションやミニワーク、懇親会を行いました。



本日のテーマ

多様性が生むまちづくりイノベーション

～先進事例から紐解く協働のデザイン～

#市民による自律した運営　#ともに考え、ともにアクションを起こす

目次

「多様性が生むまちづくりイノベーション～先進事例から紐解く協働のデザイン～」
- ▼登壇者紹介
- ▼田中さんゲストトーク
  - プロフィール
  - 前橋市アーバンデザインについて
  - マチスタントとは
  - マチスタントにおける考え方の心得
  - マチスタントで生まれたお店やコミュニティがもたらした街への効果
- ▼石田さんゲストトーク
  - プロフィール
  - 魔法の駄菓子屋「チロル堂」について
  - まほうのしくみ「チロる」とは？
  - はじまりは「縦割りの福祉事業への行き詰まり」
  - チロル堂を運営して見えたもの
- ▼クロストーク

「地域のつながりを生む仕組みやデザインとは？」
▼ミニワーク

▼登壇者紹介

本イベントの登壇者は2名。前橋市にぎわい商業課「マチスタント」担当 田中隆太さんとまほうのだがしやチロル堂共同代表 / 一般社団法人無限 代表理事 石田慶子さんより、それぞれの事例を踏まえながらお話いただきました。

▼田中さんゲストトーク

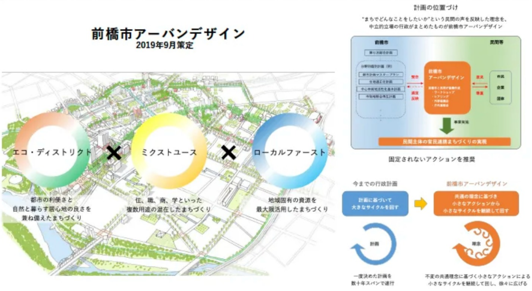
プロフィール

📌 **田中隆太さん**

1985年新潟県三条市生まれ。2008年株式会社丹青社入社、2015年から前橋市役所勤務。
行政の取り組みとして、空き物件とまちで何かやってみたい人をマッチングする「マチスタント」を立ち上げ、3年間で30件以上の新規出店やイベント実施に関わる。
その他、自作したストリートファニチャーを公共空間に持ち寄り体験型展示を行う「STREET FURNITURE EXHIBITION」などを展開。

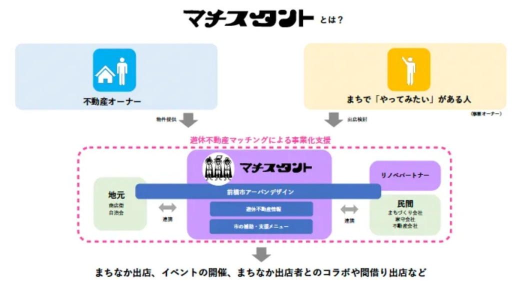
前橋市アーバンデザインについて

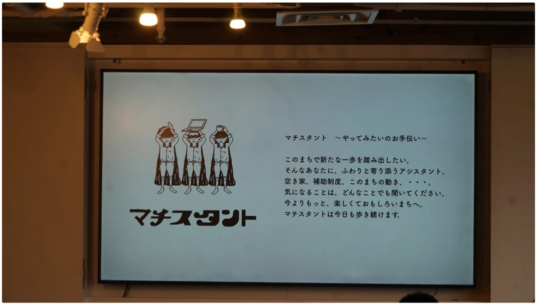
マチスタントが発足するきっかけとなった前橋市アーバンデザインは、民間主体のまちづくりを推進するための指針として2019年に策定されました。アーバンデザインの中で具体的なアクションが紐づく中、「遊休不動産利活用による商業振興・まちづくり」の部分を誰が担うのかが課題となっていました。田中さんは、行政の立場を利用しながら空き家の実態をヒアリングしていく中で、空き家所有者と事業オーナーをマッチングするプロセスを形にし、マチスタントが誕生しました。



マチスタントとは

空き家を所有する不動産オーナーとまちで「何かやってみたい！」がある人を繋ぎ、マッチングによる事業化支援を行うマチスタント。活動の内容はアーバンデザインの話をしながら事業者と一緒にまちあるきをしたり、自治会との連携などパートナー企業を集めたり。メンバーは田中さんただ一人。その理由は得た情報を必要以上に広げないためだそう。予算は何と0円…！職員の人件費のみで運営されています。また、不動産屋がやらないところをカバーしており、探索エリアの今後や地元の方の情報など、地元に入るための窓口を行うこともマチスタントの強み。





マチスタント　～やってみたいのお手伝い～

このまちで新たな一歩を踏み出したい。
そんなあなたに、ふわりと寄り添うアシスタント。
空き家、補助制度、このまちの動き、・・・。
気になることは、どんなことでも聞いてください。
今よりもっと、楽しくておもしろいまちへ。
マチスタントは今日も歩き続けます。

マチスタントにおける考え方の心得

最後に、田中さんからマチスタントを担当される中で心掛けていることを教えていただきました。

- **ハードルは低く、親しみやすく**
  - 行政の立場でもあるので、できるだけハードルは低く親しみやすくを念頭に置いてるそう。
- **とにかくまち（現場）へ出て、まちの実態を感じる**
  - 行政の立場だと、まちに出ずらかったりするそう。だからこそ、そういう人たちを巻き込んで外に出てまちの実態を感じることも大切にしています。
- **まちのコミュニティに飛び込む、そして馴染む**
  - なじみながら放るようなことを考え行政に提案していくことを行なっています。

マチスタントで生まれたお店やコミュニティがもたらした街への効果

マチスタントがもたらしたまちに対する効果についても伺いました。

- **来街目的が増え、まちを人が歩くようになった**
  - 人が一人も歩いていない…なんてこともあった前橋の商店街。しかし今は3〜4人、時間によっては10人くらい歩いています。突然はじまる井戸端会議や、お店の人とウィンドウ越しに手を触り合う姿も商店街や前橋のまちなかで見かけることが増えたようです。

更には、はじめましての人をまちの皆で受け入れる感覚も芽生えてきているようです。今回のトークから、行政の立場という枠を超え、地域のネットワークを広げる田中さんだからこそマチスタントという取り組みが更に魅力的なものになったのだと感じました。何かをやりたい人は全国各地にいる中で、前橋だからやりたい！と前橋に根付くきっかけを与える素敵な取り組みの紹介でした。

▼石田さんゲストトーク

プロフィール

📌 **石田慶子さん**

まほうのだがしやチロル堂共同代表/一般社団法人無限 代表理事
障害のある子どもたちの支援事業や、大人の就労支援事業を運営する。
2021年にはどんな子どもでも行きたくなる場所として、奈良県生駒市に「まほうのだがしやチロル堂」をオープン。子どもたちを地域の大人で支える取り組みが認められ2023年に「グッドデザイン大賞」を受賞。9月にはこれまでの運営スタイルとは違うモデルを目指す2号店南チロル堂がオープン。

魔法の駄菓子屋「チロル堂」について

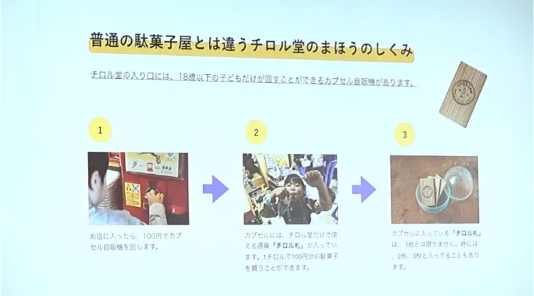
石田さんが立ち上げたチロル堂は2021年8月にオープンした、こども食堂のような機能を持つ奈良県生駒市にある駄菓子屋です。ここではある「まほうのしくみ」により、連日子供たちが集まり、駄菓子を食べに来たり、遊んだり、宿題をしたりなど子供たちの溜まり場として賑わっています。この仕組みが有名になったのは2年前、グッドデザイン賞大賞を受賞されたことがきっかけなんだそうです。

まほうのしくみ「チロる」とは？

まず、チロル堂の仕組みは普通の駄菓子屋さんと異なります。

チロル堂の入り口には18歳以下の子供だけが回すことのできるカプセル自販機があり、お店に入ったら100円で回すことができます。このカプセルには1枚100円分の商品が買える木の札（=1チロル）が入っており、カプセルによっては2〜3枚入っていることもあります。子供たちはワクワクしながら回します。そして、100円分の駄菓子だけではなく、300円のポテトフライや500円のカレー、他にもスタッフさんが作る料理なども子どもは1チロルで食べることができ、まほうのかかった100円は100円以上の価値で使用することができます。もしチロルがなく、カレーが食べたい場合は子供たちであっても通常価格の500円を支払うことになります。それは、チロル札にまほうがかかっていることを意味します。

また、チロル堂では大人が寄付や支援することを「チロる」といいます。石田さんは、日本人は寄付をするのも受けるのも苦手な国民性があると感じており、「寄付を当たり前の文化にしたい」という思いから、「寄付」という言葉を使うのではなく「チロる」と表現しています。その効果として、「今日お釣りチロっとくよ」「今日お米チロりにきたよ」など、寄付する側の行動が軽くなったそうです。



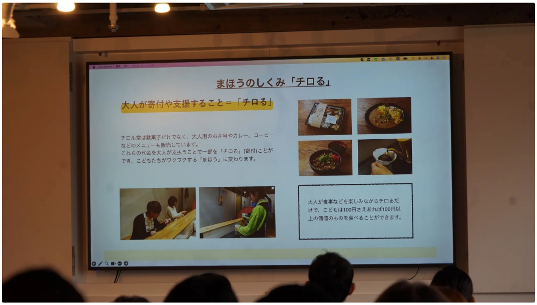
普通の駄菓子屋とは違うチロル堂のまほうのしくみ

チロル堂の入り口には、18歳以下の子どもだけが回すことができるカプセル自販機があります。

1 お店に入ったら、100円でカプセル自販機を回します。

2 カプセルには、チロル堂だけで使える通貨**「チロル札」**が入っています。1チロルで100円分の駄菓子を買うことができます。

3 カプセルに入っている**「チロル札」**は、1枚とは限りません。時には、2枚、3枚と入ってることもあります。



まほうのしくみ「チロる」

大人が寄付や支援すること＝「チロる」

チロル堂は駄菓子だけでなく、大人用のお弁当やカレー、コーヒーなどのメニューも販売しています。
これらの代金を大人が支払うことで一部を「チロる」(寄付)ことができ、こどもたちがワクワクする「まほう」に変わります。

大人が食事などを楽しみながらチロるだけで、こどもは100円さえあれば100円以上の価値のものを食べることができます。

はじまりは「縦割りの福祉事業への行き詰まり」

石田さんは元々、チロル堂と同じ奈良県生駒市で12年障害者の支援事業を行なっています。放課後デイサービスや就労支援事業などを運営する中で感じたのは**「福祉事業の縦割り」**。

こどもの問題は大人の問題だと考える石田さん。貧困問題であれば、市役所の保護課に行ってくださいと言われ、いじめの問題であれば学校の問題と言われ、いろんな問題に紐付いているのにも関わらず、どうしても境界線が引かれ手の届かないところがある現状に問題意識を抱えていました。そこで外に出てみようと出会ったのが「たわわ食堂」さん。

たわわ食堂は、老若男女問わず利用し、誰が食事を作りに来ていて誰が食事を取りにきているかがわからない形でコミュニティが成立していたそう。そんなたわわ食堂の「偶然性の支援」の形に驚いたことがきっかけで、チロル堂を支援する側とされる側の境界線がない仕組みのあり方が誕生しました。

チロル堂を運営して見えたもの

これまで支援の届かなかった子供達にも支援ができるよう、「どんな子でも来たい場所」にするべく、別な視点を持つデザイナーやアートを行なっている人たちと共同でチロル堂の仕組みを作っていきました。デザイナーさんの閃きの元、「入り口を面白くする」ため、こども食堂ではなく、ここはまほうの駄菓子屋だと、大事なことは表現しないことを徹底していました。

また、大人のルールを設置しないことで自分が許されているから受容できると、子供達の行動や考え方に変化が出てきました。はじめは各々が好き勝手に過ごすカオスな環境ではあるものの、子供達は子供達なりに自分で考え、秩序やルールを作るようになりました。また、自分で捨てたゴミでもないのにチロル堂のゴミが落ちていたという理由で、子供達がチロル堂を守る行動を行うようになりました。

最後に石田さんは、こども食堂が全国各地に増える今、もし目の前に困っている子供がいたら、「チロル堂に行けばいいよ」、と自らが助ける大人が減るのではないかと危機感を感じています。全国にこどもの居場所をただ増やし続けるのではなく、変わるべきは大人の行動であり、チロル堂としても地域の大人が支える「チロ」を増やすことが今後のチロル堂には必要だと運営して気づいたそうです。

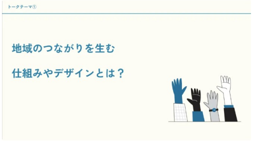
石田さんのお話から、知らず知らずのうちに誰かが助けるだろうと思ってしまう地域の中の「縦割り」に自分ごととして考え「自分に何ができるか」を考える大人の1人になろうと改めて気づくことができたお話でした。

チロル堂を
ここにも作ってください

▼クロストーク

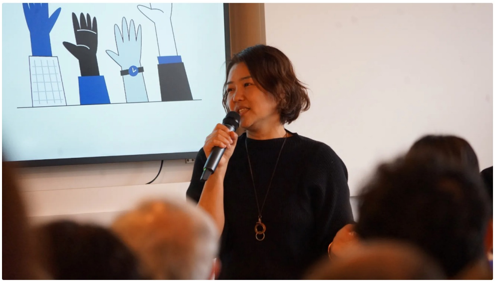
お二人のトークセッションを終え、モデレーターの株式会社ロフトワークのイノベーション・メーカーである棚橋（以下：LW棚橋）さんを交え、クロストークを行いました。

「地域のつながりを生む仕組みやデザインとは？」


トークテーマ①

地域のつながりを生む
仕組みやデザインとは？

- 石田さんへの質問。もう一つの拠点である南チロル堂ではどのような実験をされているのですか？（LW棚橋）
  - チロル堂は駅前の商業地にあるので地域性が見えずらかったんです。なので、地域性が見える場所にチロル堂を立ち上げたいと思ったのが始まりですね。まずは地域の方と対話をはじめ、自治会の方と価値観の相違などで壁にぶつかりました。でも、気づいたのは自分も小さい頃このような環境で育ったということ。今の子供達が関わる大人というのは、親と学校の先生や塾の先生といった限られた大人であり、地域の大人との関係性を持っていないことに気づきました。（チロル堂石田さん）
  - チロル堂は仕組みがいいように感じましたが、むしろ仕組みが配慮されている原因になっている部分も感じますね。（LW棚橋）



- 前橋も、マチスタントから誕生したラフコーヒーに訪れた際も話しかけられた経験があって、その時に関係ない人が気軽に話せる環境がそこにはあって、垣根がないと感じました。なぜそのような環境が前橋にあると思いますか？（LW棚橋）
  - 確かに地域全体として気軽にいろんな人が話す環境があるかというとないです。ですが、

  - まちの骨格として昔栄えていたエリアのため、地域のお年寄りは昔の地域の関係性をよく知っていて、今の20~30代はそうしたまちの人が近くで応援してくれる環境に惹かれる方が多いですね。その部分が前橋の個性になっていると感じます。（マチスタント田中さん）
  - 縦割り、排除がベースにある中で、田中さんや石田さんの周りだけ排除が消えていっていると感じます。縦割り、排除が自然なのかもしれませんが、そこで排除が消えていく場が生まれていることをお二人が活動を通じて行なっていると感じます。（LW棚橋）
- 石田さんはトークの中でチロル堂は縦割りじゃない環境を意識されているとおっしゃっていましたが、子供をスタートにチロル堂をはじめられた中でどの辺りで大人に問題があると感じたのかお聞きしたいです。（LW棚橋）
  - この仕事をしていると子供好きだと思われるのですが、実はそうでもなくて。しかし**子供は時代の体現者だと思っています。**一番素直に今の社会のいいところも歪みも子供が全部表現してくれるので、子供といると全て見えてしまいます。その姿を見て、子供に問題はないと考えました。子供の問題とはいえ子供が変わる必要はなくて、なぜ私は縦割りや境界線に敏感なのか考えた時に、自分がマイノリティになったからだと思うんです。マイノリティになって立った時に排除があると感じたことが大きなきっかけで、超えない限り、いくら人権や差別をえても、根本が変わらない限りおこり続けると思いました。（チロル堂石田さん）
  - 以前生駒市職員に「生駒市はどんなところですか」尋ねたことがあって、その時に「ベットタウンのため昼間は大阪へ働きにいく人が多い場所で、自営で取り組まれている方が少ない」と仰っていました。そのため琴瑟ということが、それ以外の人をマイノリティにしやすい場所なのではと考えていますが、石田さんはどのように考えてますか。（LW棚橋）
  - 関係あると思います。大阪に働きに行き、裕福で頭のいい子が集まる地域だと思います。子供が自己紹介を始めたとき、親の企業や役職を言い始めた話が生駒にはあって。子供がその価値観で生きていると思うと怖いです。（チロル堂石田さん）
  - 大人のルールの話にも繋がりますが、ルールがあるとそれに従ってしまって、従うことによってより評価していくというのが出来上がってしまいますよね。チロル堂のきっかけとなった、「たわわ食堂」の代表・溝口さんにお話を伺った際にも、運営するフルースクールに通う子供のお父さんが心が折れて突然会社を辞めてしまうケースが発生していて、大人のためのフリースクールもされていると聞きました。心が折れやすくなってしまっているのではと感じます。（LW棚橋）
  - 子供がどうでもいい大人に出会わなくなるのも一つの理由だと感じています。こうなりたい、ああなるべきはたくさん選択肢として与えていてもこうなりたいだけをきいて、こうなりたくないを通らず過ごしてしまっていて。そのため理想になれなかった時に立ち上がれなくなってしまうのではないかと思います。人間弱いところも強いところを知らず、立派な人は立派な人だと思ってしまうので、多面性を通ってないことが弱さだと感じます。ただすれ違うだけでもいいから、出会い続けることでしか多様が生まれないし、異質なものには自分から会いに行かない、けれど地域に出れば自分と違うものに溢れています。出会いの場をなくしているのは大人たちで、自分たちがめんどくさいからと手放していることは子供達の不安を作っていることに繋がっていると気づいて欲しいです。子供達は不安でいっぱいな生活を強いられてると思います。（チロル堂石田さん）

- 一方で前橋はある意味多様な部分を作れていると感じています。B面でやっていることは「何をやってもいいよ」というメッセージを感じますが、田中さんはどのように考えていますか。（LW棚橋）
  - マチスタントで生まれた「BENTENA SHOP」は3人で運営されているのですが、それぞれ別の仕事をしながら空いた時間にお店に立っていて、3人とも難しい場合は自分が仕事を休んで店頭に立っています。店頭に立つと、突然似顔絵をかく変な大人や近くの駄菓子屋から来る小学生との交流が前橋の日常の一部となっていて、A面だと排除されそうな景色でもB面だから成り立つ景色があって、みんな見守りながら共存しているのが面白いです。（マチスタント田中さん）
  - 成り立っている一つとして、「挨拶する」のも大事だと思います。島根県雲南市でコミュニティ運営をされている矢田さんという方も、「挨拶をしないのにイノベーションは起こらない」と仰っていて。挨拶をする中だと雑談が始まり、時々こうしたらいいのでは？という雑談の中の小さな一言からイノベーションが始まったりするので、その流れが生まれるためには挨拶が大切ですね。前橋はそれが起こっていると感じます。（LW棚橋）
  - マチスタントから生まれた「LAUGH COFFEE」でも同じ現象があります。お店のカウンターで立ち飲みする人は、同じく雑談からイノベーションが起こるような話をしています。オフの状態で行なっていて、頭の片隅でまちのことを考えながら話していたりするので、突然まちの紹介が始まったりする面白さもあります。（マチスタント田中さん）
  - オフで話すことは縦割り外のことを話しているのに、でもそれが仕事に繋がってくるので、それもまた偶然性の支援と同じところかなと思います。（LW棚橋）
  - 繋がりましたね。（マチスタント田中さん）

地域のつながりを生む
仕組みやデザインとは？

▼ミニワーク

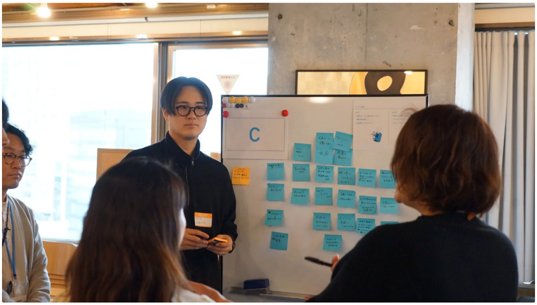
📌 **ミニワーク内容**

・参加者自身の自己紹介と、イベントでの学びのシェア
・次のネクストアクションを考える

トークセッション後、5チームに分けてミニワークを行いました。登壇者のトークから学んだこと、自分たちの事業に活かしたいことをそれぞれ付箋に書き起こしながらグループで話し合いました。

講演をきっかけに、「ルールとは何か」であったり、日々の子どもへの関わり方を見直す機会になったという声が多くありました。ネクストアクションでは日々の当たり前を見つめ直すような行動を宣言する参加者も多くいました。

また、「街で交わされる挨拶」や「自分がまちに繰り出すこと」の大切さを感じ、主体的にまちにかかわりたいと感じた参加者も多くいました。



イベント終了後の懇親会では、助成対象者同士の交流だけでなく登壇者やロフトワークからの招待者の方とも交流が生まれており、終始和気藹々とした雰囲気でイベントを終えることができました。今回のイベントが皆さんの今後の事業に活かせると嬉しいです！ご参加いただいた皆様、ありがとうございました！🌱

執筆・渡邊（LW）